
何故私はこいつに恋をした？

R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故私はこいつに恋をした？

【Zコード】

Z0778U

【作者名】

R

【あらすじ】

社会人一年目…（厳密に言えば2週間くらいだけど）の私はその日、変な空間に落つこちました。所謂異世界で、王子様の上に落つこちたから、普通はその人に恋をして結婚するのが王道なんだろう。でも、そんな私が恋をしたのは第一印象最悪の人物だつたのだから。恋を自覚するまでかなり道のりは長いです。

人間的扱い求む。（前書き）

初めまして。

私が好きなキャラとくつつかない事に苛立つてやってしましました。
後悔はしてません。

人間的扱い求む。

えー、皆さんどうも初めまして。森 桜と申します。先日、社会人になつたばかりのピッチピチの私ですが、桜という名前の通り春生まれでして、すでに普通の人たちよりも一つ年齢が上になつてしまして…と現実逃避はここまでにしましょう。何故、何故、私は牢屋にぶち込まっているのでしょうか。

「こつから出しやがれえええええ！」

2日間も牢に入れられ、ぶち切れた私の渾身の絶叫は見張りの兵士によつてぶん殴られて終わつた。

…ひでえよ、マジで。一応女子なのに。

じんじんと痛む頭を手で擦り、何故こうなつたかを改めて振り返つてみる事にした。

・

「うえ…疲れたあ…」

新入社員の私は、ここぞというばかりにしぼられた研修期間という名の鬼合宿から解放され、重いボストンバックを肩に掛けながら一週間ぶりの我が家への帰路についていた。

「ん…？」

目の前にゆらゆらとした空間。その向こに見えるのは久しぶりの我が家。

「ああ…なんだ、陽炎か…」

あの時の私はどうかしていたのだ。そう、疲れすぎていたのだ。春に陽炎なんか出るわけがない。むしろあつてたまるか。

陽炎か、と一人納得した私はそのまま脚を進めた。早くベットに

飛び込みたかったのだ。まあ、結局違うベットに飛び込んだのだが。

がっくん

「う、え！」

可愛さの欠片もない言葉を残して、私はその『空間』に落ちた。一瞬の浮遊感の後、私のふつかふかのベットに顔面から落つこちてた。

「へふ！」

柔らかいとは言え、空中からの顔面ダイブ。痛いわけがない。

「ぐおおおお。ない鼻がもつとなくなるっ……」

ボストンバッグを肩にかけたまま一人悶えていた私の首許に冷たいものが押し付けられる。

「　　」

「え？」

人の声に振り返ろうとしたが、後頭部をガツチリ押さえつけられていて振り向くことはかなわなかつた。がしかし、首許に突きつけられている冷たいものと、何語かわからないが低い齧したような声。もう何が起こつたか一発でわかつた。きゅぴん！と一瞬にして凍りついた私を、押さえ込んでいる人物は晒つた。そして、また二言三言何かを言つたと思つたら、激しい音がしてドカドカとなにかがたくさん入つてきた。

「　　」

「？」

入つてきた人物が何かを叫び、後ろにいた人物の手が放されたと思つたら、今度は右側から容赦なく二の腕を掴みあげられ、痛みと恐怖に声をあげた。

「お、お命だけは！」

その言葉に私の二の腕を掴んでいた男が眉を寄せる。その男は甲冑を身に纏つていた。

とんだコスプレ殺人鬼だな！

もう私の中では彼らは通り魔的犯行の殺人鬼になつてゐる。だって私は道を歩いていただけなのだからね。……って、私は何故か知ら

んが、どっかに落ちたぞ。じゃあ、リリはどこだ？

改めて自分のいる場所を見たら、天蓋つきの高級そうなベットの上だった。どこやねん、ここ。

卷之二

キヨロキヨロと辺りを見回していた私の意識を戻すように、容赦

なく腕を握り締められた

卷之三

だからここで痛いなんて暴れたら確実殺られる。私は出来るだけ友好的な笑みを見せようと、引き攣った笑顔を甲冑の男に見せた。男は再び眉を寄せ、口を開いた。

何語だ。確実に英語じゃねえ。せめて、ヨーロッパとかやめて喋れないよ。だが、英語は世界共通語。大の大人が何も判らない訳がない。むしろ相手のほうが英語わかつてそuddish。」

「I can't understand your language.
age.

発音がいいわけじやないか、必死で言葉を紡いだ。文法が間違つていようが知つたこつちやねえ。伝わればいいんだよ！

だが目の前の男は怒りを露にした。

— 1 —

と同時に顔面に衝撃が走り、視界がぶれた。

何事かと思つたときには痛みが走つたので私は目の前の男に平手で打たれたのだと理解した。

ひでえ！父さんにも打たれたことないのに！（ただし母はある）
目を丸くしている私の横で、金髪碧眼のえらい顔が整つた外国人
が微笑を浮かべ、男の手を制していた。

ここで、なんて素敵な殿方なんでしょう！と思わない私素敵。いやだつて、そのイケメンの手には短剣が握り締められていたからね。

どう見てもさつき私の首許にナイフ突きつけてた人でしょうが。

— 7 —

笑みを浮かべたまま首を傾げられるが、何を言つてゐるのかわからないので私は反対方向に首を傾げた。横で顔面を殴つた甲冑が拳を握り締めていた。それを止めるようにもう一人の甲冑が肩をポンポンと叩いて宥めていた。

横目で眺めていたが、イケメンに頬を片手でガツチリを押さえ込まれ、視線を合わせられる。そして、

?

たぶんもう一度同じ事を聞いたのだろう。私はまた首を傾げた。王子は苦笑すると、一言三言私を殴つてないほうの甲冑（この人を甲冑その2と呼ばう）になにかを伝えた。甲冑その2は「御意！」的な肯定の言葉をいい、その場から立ち去つた。

このイケメンが一番えらいのか。イケメンだからか。
ぼけーっとイケメンの顔を眺めていると、甲冑その1に頭を驚撃
みされた。

卷之三

するりと引っ張られ、頭からベットから落ちる。
いや、待って。もうちょっと人間的扱い求む。

いや、待つて。もうちょっと人間的扱い求む。

ぐぢや、どべッテのトマトを漬れ、その上に重いボストンハツクが降つて來た。

いたし！」

腰：私の腰はもう駄目だ…。

痛みに悶え苦しんでいると、遠くから足音が聞こえてきた。そして、ドアが開かれ、入ってきた男は、これまで吃驚するくらいのイケメンの銀髪男だった。

そのえらくイケメンな男は私を見た瞬間顔を歪め、なにやら一言三言甲冑その1に何かを言つた。と同時に甲冑その1に腕を掴まれ、押し倒され、手を後ろに回された。

痛い痛い痛い！肩の関節は硬いんだよ！

呻く私を無視しながら、縄を腕にかけようとしていた。がしかし、ボストンバックが邪魔だつたのか、剣で肩掛けの紐（紐と呼んでいいものなのか）を切り、そばにどけていた。

それ親父のボストンバックなのに！あああああ、怒られる……！！青褪める私は無理矢理立たされ、何度もド突かれながら強制的に歩かされて着いた場所は牢だつたのだ。そして、何もないまま私は2日間放置されていた。

いや、さすがに食事はあつたけど。味気なかつたけど。
兵士に頭を殴られ、イライラした私はネチネチと嫌味を言い続けた。どうせ、言葉理解してないんだろう！

私がうるさかつたからか言葉はわからなくとも悪口を言つているのがわかつたからか、今度は剣で格子を殴られた。があーん、と言うほどが牢屋全体に響き渡り、私はそこで口を噤んだ。

不貞腐れ小汚いベットで横になり、うとうとし始めた頃、足音が廊下に響き渡つた。

ご飯！！

私は勢いよく飛び上がり、格子まで走り寄つた。格子を掴み、ぐぐぐと顔を近づけて外を見る。階段から降りてきたのは、兵士ではなくあの銀髪野郎だつた。

「ご飯じゃないのか…。

なんて軽く絶望していると、バッカリと目が合つてしまつた。物

凄く不機嫌だつたらしく、射殺さんばかりに睨みつけられた。

「！」

私は慌ててベットの上に飛び乗つた。

くそ、かてえなこのベット！膝がいてえーー！

なんて思ひながら膝を擦つていて、私の牢の前で足音が止まつた。不思議に思つて後ろへ振り向くと、案の定銀髪野郎が立つてい

た。

「……」

「……」

数秒見つめあつた後、先に視線を逸らしたのは銀髪野郎だつた。

「

不機嫌な顔を隠さず、一言兵士に何かを言つと、兵士は慌てて鍵を取り出した。

鍵…？

「！」

え、ちょ、嘘！出してくれんの？！

パチパチと拍手していふと、牢の中に入ってきた男に力加減ゼロで一の腕を掴まれた。

『喋つたら命はないと思つてくださいね』

「うん、ですよね。

・

脚の長さが違うのに、前の男は自分のペースで歩くもんだから、腕を掴まれている私は殆ど転びながら走つて追いかけていた。

くつそ、イケメンだつたらなにをしても許されると思うなよな！ それにしてもでっかい邸だなあ。牢から出されたつて事は解放してくれるのか？

『喋つたらどうなるか言いましたよね』

「ひえ、声が……！」

私の悲鳴を無視し、彼はにっこり笑う。そして、私の腕を掴んでいない手を私の肩に翳した。

バチン！！

「い、つ……！」

強い電流が走ったような感覚がした。

な、なにこの人！超能力者？！

『あなたには後で色々と話すことがあります』

「話す事？」

『……頭で考えてください』

『頭で……』

『そうです。その調子でお願いします』

馬鹿でもこれくらいならわかりますよね……ってなんだよー…私だって一応大学出てるんだぞ！…ばーか！…ばーか！

『馬鹿はあなたです。考えたものは全部私にわかると言つことをお忘れなく』

うぐ、と口を噤んだ私を心底哀れに見下ろしてきた。

『……あなたは 空間の狭間に落ち、そして私たちの国へ落ちてきました』

『は？』

『とりあえず、先に入浴してください』

心の声が全部駄々漏れというものは便利だね。目の前の男から、臭い。という言葉が伝わってきた。

『女子に言つ台詞じゃない……』

私は男の手を引っ張り、自分の体の臭いを嗅いでみた。

『くつさーなにこれくつさー』

『じや、しかたねえや。』

・

男は臭うと言つ羞恥に悶える私を無視し、脚を進めた。チラリと

・

振り返ったところを見ると、ついて来いということらしい。乙女としてのプライドを碎かれ、涙目になりながらも健気に私は銀髪野郎の背を追った。

「つぐ……」

辺りを見渡しながら歩いていると、急に止まつた銀髪に気付かず、そのまま背中に顔面からぶつかった。ギリと睨みつけられ、慌てて体を離す。

「？」

会話が聞こえ、男の後ろから顔を出すと、まあなんということでしょう。素晴らしく美しく可憐な美少女メイドが笑顔で立っていた。『こんな子をメイドにするなんて、変態が住む邸なんだな』はつ

なんて思つていて、嫌そうな顔で、今度は手を取つた銀髪野郎。『彼女、ミリティア・スヴァンがあなたを入浴させてくれます。く
れぐれも欲情しないように』

私をなんだと思っている！変態つてか？！

心が駄々漏れといつことを忘れ、憤慨していると男に鼻で笑われた。

『入浴後、殿下……いえ、皇太子様が応接間にいづらつしゃいます。その鼻がひん曲がるような悪臭を消してもらつてください』

そう言つと、男に雑に腕を払われ、私は風呂場らしき部屋に横転した。

くつそー！この人間は粗暴な奴しかいのか！

恨み辛みを去つていく銀髪野郎の背中に投げかけていると、田の前が翳つた。

「つ

顔を上げると、無表情な美少女メイドが私を見下ろしていた。え、なに、こいつわー！ちょ、さつきの笑顔はどうこつた？！

「……」

低い声で何かを言われた。

どうせ、悪口ですよね！

美少女は顔を歪めると、私の首根っこを掴んだ。

「ぐげつ！！」

これリクルートスーツだから…もつと丁寧に扱つて…いや、むしろ私を丁寧に扱つて！

苦しげな声をあげる私を無視し、どこにそんな力があるのか知らないが、美少女は私を脱衣所にぶん投げた。

「げほ、げほげほ…」

咽でいる私を他所に、美少女は服を黙々と脱がしていく。

「ちょ、ストップ！」

服くらい逃げる…いや、むしろ一人で風呂にも入る…！
制止の手は、物凄い力で叩き落とされた。じんじんと痛む手に気を取られていると、美少女の手は既に私のブラウスに及んでいた。処女じやねーけど、恥ずかしいわ…！なんでこんな美少女に服を脱がされなきやいけないんだ…！

バツと開けられた胸元を見て、美少女は固まつた。

「え…？」

「つきやああああああああああああああああああ…！」

鋭い悲鳴に私は目を白黒させた。

え、むしろ悲鳴上げていいの私ですよね…？

バーン…と凄まじい音を立てて開いたドアの先には甲冑その1。

「うあ…！」

般若のような形相をしていた甲冑その1は私を見ると、体を180度回転させた。どうした、と思ったが私の格好を思い出した。

一応女として見られたのか。ちょっと嬉しい。

なんて思いながら、私は胸元のブラウスを手繰り寄せた。そこへバタバタと足音が聞こえてくる。

どうせ、銀髪野郎でしょ…。今度はなにで怒られるんだか…。

「はあ…」

溜息をついたと同時に入ってきた彼は、私を見ると目を丸くした。
そして、慌てて甲冑その1を追い出し、『気まずそうな顔で私の前で
膝をついた。そして、そつと手を取られ、一言。
『あなた…女性だったのですか…』
…ん?

おじしゃつな名前

身長：163センチ

女性の平均身長よりは高いけれど、男性の平均身長よりかは低い。
髪型：ショート

大学生になるまで、ずっとスポーツをしていたからベリーショート
で、まだ名は『モンチッチ』だったけど、今は耳より下まで襟足はあるし、前髪も分けるほどの長さ。

服装：リクルートスーツ

ネクタイはしていない。まあ、当たり前だ。でも、私はパンツス
ーツである。そして、5センチほどのヒールを穿いている。

「ヒールのせいか…？」

身長が168センチくらいあるのが駄目なのか？いやいやいや、
目の前の男は180近くかそれ以上の身長だ。…顔か。

『顔ではありません。髪の長さです』

「え」

やつべ、筒抜けだつた。身長とかばれたし。別にいいけど。

『この国では、女性の髪は長くなくてはいけません。短いことはあ
りえないのです』

『なるほど…』

そう言えば、王子も髪の毛が長かつたな。

『申し訳ありません。私たちの価値観をあなたに押し付けてしま
いました』

『え、あ、大丈夫です』

じゃあ、あんなに乱雑な扱いをされていたのは男だと思われてい
たからか？

ふとした疑問も筒抜けである。

『それもありますが、王族の傍に無闇に近付くものは徹底的に排除
されますので、たとえあなたが女性だとわかつっていてもあの対応で

「……顔は殴られないと思いませんが、ちょっとやりすぎた自覚はあるんだな……」

なんて思つていると銀髪野郎はサッと立ち上がり、固まつている美少女メイドに手を貸していた。美少女メイドは顔を赤らめながら手を取り、立ち上がつていた。そして、私は放置でそのまま出て行つてしまつた。

おいおこおいおい、いつもあからさまな不公平はどうかと思いますよー。社会人として駄目ですよー。私が言える立場じゃないけど。美少女メイドがポーツとしている間に自分でわつと服を脱ぎ、全裸になる。そして、勝手に脱衣所から抜け出した。

「うおー、すっげー……」

ありきたりな感想しか私にはないが、それだけ浴場は凄かつた。かなり大きくて広く、大理石のようなもので浴槽は作られていた。しかし、なぜだか全体的にピンク色……。

「そしてキツイ花の香り……」

嫌いな香水の香りだな……。

なんて思いながら仁王立ちしていると、いつの間にか入つてきていた美少女メイドに頭の上から湯をぶつ掛けられた。

「つぶえ！」

桶だとか蛇口なんてものはないのに、彼女はどこかから私に湯をぶつ掛けてきた。手で掬つて掛けたなんてかわいらしいものじやない。滝で打たれたような強さだった。

「え、あ、…自分で」

問答無用とばかりに睨みつけられ、なにやらスプレーのよつなもで顔に液体を掛けられた。

「うえ……」

なにすんだ、と舌つ舐葉は出なかつた。

「う……」

視界がぐらりと揺れ、脚がガクガクとし、立つていられない。よろめきながら後退り、タイルに背を預け、ずるりと腰を落とした。

「つは、つは、つは、つは……」

心臓が全力疾走をした後のように早鐘を打ち、呼吸が乱れる。

な、なんだ……何をした。

虚ろな目で美少女メイドを見上げると、彼女はさつき銀髪野郎に見せたような可憐な微笑みを見せた。その後、動けない私を「じご」と痛みが走るほど洗つたのは当然のことだったと思つ。

動悸と呼吸の乱れは収まつたものの、体が言つことを利かない。ぐつたりとする私に美少女メイドは無理矢理服を着せた。

ワンピースとか幼稚園児以来だよ……。

なんて思うことは出来ても、立つことはおろか歩く」とさえ出来なかつた。そしてそんな私は今、甲冑その2に負ぶわれていた。

「すいまひえん……」

心なしか呂律も回らない気がする。

甲冑その2に私の謝罪は伝わつたのか、少し微笑まれた。顔は殆ど見えないし、甲冑が胸とか腹に当たつて痛いけど、甲冑その1にぶん殴られたことを思い出せば、この人はかなりいい人だと思つ。超いい人。今私の中で、この人が一番いい人。

『そのだらしない顔を引き締めてください。今から殿下と謁見です

よ

謁見と言われても……。

実は後ろを歩いていた銀髪野郎にガツと頬挟まれ、背筋をしゃんと伸ばす。それに気付いた甲冑その2に優しく下ろされ（ようやく立てた）。そのまま脇に控えようとする甲冑その2の手を慌てて取つて、ありがと「ひづ」と言つことを念じてみた。

「……」

困つた顔をされた。

なんだ、通じないのか。

慌てて手を離し、ペコペコと腰を折った。そんなことをしていると背後のドアが急に開き、慌てたような銀髪野郎に頭を掴まれ、体を180度回転させられた。そこには金髪碧眼の男が満面の笑みでドアノブを握つて田の前に立つていた。

「

なにやら言った王子に対しても反応のまま立つてみると、頭蓋骨が軋んだ。

「い、ごめんよう……！」

このままじゃ握りつぶされる危険性があつたため、王子様と言えばという短絡的な思考の私に浮かんだ最上級のあいさつがこれだつた。通じていいわけがないのだが、王子に軽く笑われ手を取られた。その瞬間、再び頭が圧縮された。

「ぐう！」

田の奥で星がちらつく。

「 、 」

そんな私を助けるよつて、王子がなにやら銀髪野郎に言った。その言葉で渋々と言つたように放される手。

さすが王子、部下の扱いわかつてゐる。

そのままゆっくりとした動作で腕を引かれ、ソファに座らされる。私が薬物を使われているのを知らないでこの行動だつたら、王子に惚れるわ。なんだこのレディーファーストつぱりは。もしやそういう育て方をされているのか。

王子の隣に鎮座していたが、銀髪野郎に引っ張りあげられ、机を挟んだ反対側に座らされた。肩に置かれた手がギリギリと食い込んでいる。

「ははは」

王子、超笑つてゐよ。ていうか、銀髪野郎笑われてやがるよ。

肩でも、私に触れていたら心は聞こえるらしく。また電流攻撃をされた。

「...せんじ

ふるふると震える私を見て王子はまた笑っていた。

卷之三

銀髪野郎の咎める声にやつと王子は笑いを引っ込んだ。そして、
私にまた手を差し出した。その間に銀髪野郎が私の右側に座つてい
た。

？」

語がわからないままかた三を三には單にれ
二二二、限多野アーニバ、或つ二二二、アーニ。

『なにこれ、宇宙人との交信?』

『会話成立のためだよ』

アーティストの「アート」が、アーティストの「アート」。

もしや、これは王子か…？

あなたはもう少し殿下を敬しなさいよ

卷之二

『うーんてつど…』

右手の骨が砕かれるかと言ひ、ほど振り繰められが

セシア＝ルクドリアって、いうんだ

アーティスト

セレニティ・シルバーフィルム

『わ、私、森 桜って言います！今後とも『櫻』にお願いします！』

「ニガカニガニ。

モリー？

『あ、えつと、桜森です』

『シャクウ？』
『さ、く、ら…です』
テメエ王子の言葉を訂正しやがったな…。的な目で隣の人物が睨んでくるので、これ以上は訂正しないで置こうと思います。

『シャクウラ』
『はい、王子』
『…シャクでいい？』
『ええ、どうぞ』
どうも“さ”が発音し辛いらしい。
『ほら、お前も』
『…クラドヴォゲリア・サレッード』
『クー…サレッド』
あ、駄目だ。殺られる。
この気持ちが二人共に伝わり、王子が噴出した。
『おもしろいなー、ホント。二人は犬と調教師みたいだ』
中型犬がいいな、と思つと王子の腹筋が崩壊しそうになつていた。

これ、王族命令。

『つまり私は、この方の杜撰な魔術で作ったゴミ箱に落ちたと言つことですか？』

この方とは、私の右手を碎かんばかりに握り締めてくる銀髪野郎のことである。

『クー曰く、異世界に通じるような魔術じゃなかつたんだつて銀髪野郎の愛称はクーらしい。たぶん呼べるのは王子だけだらうけど。

『……えつと、なんでしたっけ。しあ…』

『シア・デュアハンね。それに魔術実験で出来た危ないものとか失敗作を捨てることの出来る空間をクーは作させていたんだよ。ある程度の大きさが出来たら、シア・デュアハンに自然消滅する魔術を施してあつたはずなんだけど…』

王子が笑みを絶やさないままチラリと銀髪野郎を見た。銀髪野郎は口を引き締め、顔を硬くしたまま微動だにしていない。何も考えていいのか、防いでいるのか、彼の心はなにも入つてこない。

『そのシアさんが消えずに空間を作り続けて、私の世界と繋がつてしまつたと…』

『そんな穴に君は落ちたと書つことだね』

ちなみにシア・デュアハンは人じやなくて人形だから、敬称は必要ないよ。

王子は私の顔を見て、楽しそうに笑う。初対面で短剣を突きつけてきた人とは思えない豹変っぷりだ。

『そう？僕は王族だから、あの対応は仕方ないとと思うよやべ、ちょっと頭で考えること自重しないと。でもまあ、『そうですね…王族たるもの、暗殺に備えて危機管理が必要ですよね…』

今考えると私が生きてるのって奇跡に近いよな…。

『で、君は一番大事なことを聞かないの？』

『はい？』

バチ

『い！』

間抜けな顔を晒していたのか、手を繋いでいるのに顔に電撃が走つた。

最早躰の域に達していると思つんだ、この電撃は。『自分の世界に帰ることは出来ますか？つてすぐ聞くと思つたんだけどなあ』

『ああ、なるほど…』

表情を一つも変えなかつた銀髪野郎は、そこで初めて眉を上げた。

『帰りたくないの？』

『いえ、なにやら帰してもらひえのよつな気がして聞いたと言つますか…』

『… 帰れない氣でいなかつたと言つのが本音だ。』

『うん、聞こえてる』

『やだー、王子つたらー』

バチン！！

『うつ…』

『こらこら、クー。女の子相手だからまあ見えないけど。』

聞こえてる、聞こえてる。王子、漏れてるから。

『それでね、帰るまで少々時間が掛かりそんなんだ』

『え？どうしてですか？』

『シア・デュアハンが消滅する前に、君が来た道を塞いでしまつたんだ』

自分のしたことの間違いに気がついたのか、他の異世界に繋がつていたところもせつせと修復してから、魔術どおりに消滅してしまつてね。

『探すのに時間が掛かるんだって』

『そりだよね、クー。

『…殿下的意に沿えず申し訳ありません』

『ま、僕はこのシャクとちょっと遊びたいし、問題ないかなあ
シャクっていう呼び名にそろそろ慣れないとな。たぶん、王子だけじゃなくて他の人もおそらく“セ”を発音できないと思つ』

『王子、ところでそれはどれくらい掛かりそですか？』

『うーん、どうだろ。クーの作業の進行具合によるよ』

でも、クーは宫廷魔術師で引っ張りだこだからな…。ちょっと時間掛かるかも。

『他の魔術師さんはどうなんでしょう』

『クーほど頭がよくて魔力がある人物がいないから、まず君の世界を探すこととは出来ないんじゃないかな』

『なるほど…』

『で、だ。僕はクーに罰を『えよつと思つてね』

『で、殿下？』

銀髪野郎の顔に始めて焦りの色が浮かぶ。
なんだ、そんな顔も出来るんじゃないかな。

『彼女が落ちたのはお前の失態だ、クーラード・ヴォゲリア』

『返すお言葉もございません…』

真面目な顔をする王子は、やはり王族。威厳があるといつが…怖いです。

『お前には…』

『どんな罰でもお受けいたします』

王子はにっこりと笑い、私は銀髪野郎と一緒に顔を引き締めた。

『お前には、彼女の教育係になつてもらつ』

『『は？』』

私と銀髪野郎の声が被つた。

『シャクには魔力がないから、お前がいないと会話すら出来ない。と言つわけで、帰るまでに彼女に言葉とある程度のこの国での一般常識を教えることを命ずる』

これ、王子命令。

と語尾にハートが付き添うな甘い声で命令された。

『で、殿下。お言葉ながら、私が教育係をする事になりますと、彼女の世界の探索に回す時間が減ることに……』

『彼女に非はないのに、言葉が不便なままこの国に置いておく訳にはいかないだろ？』

『……しょ、承知いたしました』

銀髪野郎の顔は、見たこともないほど歪んでいた。よつよつと嫌なのだろう。

『シャクは王族の客人として招くから、衣食住には困らないよ』

『えつと、ここにいる間に私、働いても大丈夫ですか？』

『…それをシャクが望むなら』

王子の手を煩わせんじゃねえつて田でこいつちを銀髪野郎が見てくるが、元はといえばお前のせいだろーが。

『でもシャク。なにをするつもりなの？』

さすがに王宮を出るような仕事はさせてあげられないよ、身の保障は出来ないからね。

言葉が不自由なまま、外に出る勇気もありませんよ。

『その、王宮ではどのような仕事がありますか？』

『えつと、下女・侍女・女官・兵士・執事・庭師…んーんー、あとなんだろ？…？』

『しかし、言葉なくてはどの仕事もできません』

王子が助けを求め、銀髪野郎を見るが、銀髪野郎は私にどの仕事もさせん気はないのか、王子の視線に対する答えは返さなかつた。うーん、私の得意分野といいますか…唯一の特技と言いますか…それが出来るといいな。

『シャク、どうなの？』

『えーっとですね…その、マッサージ師つてのはどうでしょうか？…マッサージと言ひ言葉が日本語から彼らの国の言葉にちやんと変換されてることを願う。

これ、HIN命令。（後書き）

第一印象が最悪の人物に桜が恋に落ちるということで、これから現れる新キャラはみんな最悪にしてみようと思います。
最悪じやなかつた人は、恋の相手ではないと言つわかりやすいシステム（ry

…やはり痴女だったのか（前書き）

前回の最後の部分に矛盾が生じたので、少し改訂しておきました。

……やはり痴女だったのか

『まつやーじ……？』

やつぱり、伝わらなかつたか……。

『なんですか、それは』

銀髪野郎の鋭い眼光に、少したじろぐ。だつて、感情に乗つて伝わつてきたのは電撃の一言だつたからね。

『えつと、その、相手を気持ちよくさせるものでして……』

ビシリと二人の顔が固まつた。

え？ なんだ？

『……シャクは幼いのに凄い仕事をしていたんだね』

『……やはり痴女だつたのか』

一人が考えている想像を絶する卑猥な言葉たちががどんどんと私の中に流れ込んできて、彼らがかなり誤解していることがわかつた。

『ああ、ちょ、待つてください！ 誤解です！ 違うんです！』

私は大学四年間バイトとしてマッサージ……いや、エステと言えばいいのか、そういうお店で働いていたのだ。研修期間を過ぎれば、私も人前に出させてもらえる。そこで四年も働いていたから、ベルランとみなされていたし、両親も店長も従業員の方々も私がそこで就職するもんだと思つていたらしいし、腕はなかなかのものと言いたい。

『シャクがねえ……』

その顔やめろ！ んなことしねえよ……！

『な、なら実践しますよ……』

だから王子……そこでうつ伏せになつてください……！

『えー、いいけどさー』

『殿下、おやめください。この痴女はどくへとに紛れて殿下との子供を狙つているのかもしません』

んな訳ねえだろ……！

その言葉が通じたのか、王子は笑ってほらね、と言つた。

『えー、えつと、その、じゃあ、ジエルとかローションなどありますか…』

この流れでジエルとかローションとか言つたら、またもや誤解されそうだ。

『じぇる？ ルーしょん？』

王子は下つ足らざな口調で聞き返してきたといふを見ると、云わらなかつたようだ。

な、なんかその下つ足らざが卑猥だ…。

『その、油のようなものと言つますか…』

『香油でいいですか？』

『はい！ 香油でお願いします！』

さうか、香油か、なるほど。香油なんて現代じゃ口にしないから、思いつきもしなかつた。

銀髪野郎と王子が一緒に手を放す。王子は煌びやかなジャケットのよつなものを脱ぎ、中のワイシャツのよつなものになつていて。その間に銀髪野郎は戸の外にいた甲冑その2に何かを言つていて。甲冑を銀髪野郎から離し、脱ぎ终わつた王子に手を伸ばし、手を繫ぐ。

『服を脱いでもらつたといひで申し訳ないのですが、痛いといひつて上半身ですか？』

『ん？ 痛いといひつて…』

『痛いといひや凝つたといひを解すのがマッサージと言つます』

『へー、覚えたよ』

王子は少し思案して、肩と腕が重いと仰つた。

『では… 肩にしましようか』

『さう？ ジヤあ、脱ぐよ』

そう言つて手を放した時、私の横に銀髪野郎が戻つてきた。机の上に高価な壺のよつなものが置かれ、ナチュラルに手を繫がれる。

『これ、どうやって出せばいいんですか』

『頑張つてください』

なんだよ、それ。使い方ぐらい教えてくれたつていいじゃないか。不愉快な顔を見せたら電撃を食らうやつなので、何も言わずに王子に田をやつた。

『「じつ ふーなんだ、これーHシロー・やつべ、ホジHシロー。』

『…本当に痴女認定しますよ』

前を寛げ、肩だけ出した王子のHロをほ堪らんかった。いや、別に欲情なんてしてないから。

『えつと、じゃあ、失礼します』

銀髪野郎の手をやんわりと解いて、壺に手を掛けた。

なにこれ、本当に壺？いや、見た田は壺だけ…どうやって開けるんだ…。

「んぎゃわわわわ」

変な言葉を発する私を見て、王子はうつ伏せの状態で顔を上げて笑う。

ちよ、なにこれー蓋かたつ…未開封のジャム瓶みたいな固さですけど…！

「

見かねた王子が何かを押す仕草をした。

「？」

蓋だと思った部分を指で押してみると、机の上に香油が飛び散った。

「すすすす、すいません…！」

なんだよ、これー普シュタイプかよー…そこだけ進化してんじゃねーよ！

パニックになる私に対して溜息をついた銀髪野郎がなにやり返すと、綺麗さっぱり私が汚した部分はなくなつた。

「や、それじゃあ…」

気を取り直して。

ソファでうつ伏せになる王子の横に立つて、満遍なく香油を伸ば

す。この香油、お風呂で嗅いだ臭いと一緒にある。

王族はバラが好みなのか？

「 」

王子は気持ちよさそうに手を組め、間延びした声をあげる。

「気持ちいいですねー」

そんな私の一挙一動を銀髪野郎は監視している。どうやら私が王子の上に跨る、またはナイフでブツ刺さんか注意してこようつだ。いや、せめて。

数十分後。

『いやー、気持ちよかつたよー、シャクー』

『ありがとうございます』

満足そうな王子にホツと漏れるため息。怖いんだよ、銀髪野郎が。

『シャクは幼いのにすごいねー』

『はあ……』

王子と年齢変わんない気がするけどな。

『これなら、まつせーじとやら、してもいいよ』

『本當ですか?...』

やつた、王子からオッケーの言葉をいただいた！

『ところで、あなたはそれでお金を取りつもりなのですか?』

『いえいえいえいえ、滅相もない!』

慌てて銀髪野郎の言葉を否定する。

『私はここにおいてもう一つ身なので、王族で働く方々の癒しになればと……』

ぶつちやけ、動いてないと嫌だつて言つだけなんだが。

『シャクはいい子だね』

なでなで。

おい待て、ガキ扱いはやめい。

『これなら大丈夫だと思つ?クー』

『あらかじめ何をするとこり明記しておけば、わかるでしょう。言葉がわからなくても、解したい部位は手で指せばわかりますし、おおお、銀髪野郎の許可も出ئتうだー』

『どこで開こうか?』

『兵士や下女の出入りが激しいところがいいのではないかと、侍女や執事になると、見知らぬ人間に体を触れられるのは嫌でしょうし、兵士や下女よりかは肉体の負担も少ないでしょう。』

『そうだね。じゃあ、看板作つておいてよ、クー』

『…私がですか?』

『うん。僕は、気持ちよかつたつて嘘伝しておくれ』

『…わかりました』

『まあ何はともあれ、出店先は決まつたようだ。』

『ところで、シャク』

『はい』

『変な奴も来ると思うから、そういう時は問答無用で暴れるか、人を呼ぶんだよ?』

『はあ…』

『看板の意味を履き違えて、娼婦と同じようなことをさせむかもわかりませんしね』

『交互に私に対する注意を言つてくる一人の顔を見つめる。な、なんだよ。なにがそんなに心配なんだよ。』

『男色の兵士もいると思うので、襲われないよつて注意してくれださいね』

『そういう心配かよーー!』

望むところです

何はともあれ、私が王族の客人だと「うり」とはこの王宮内で広められ、好奇の視線に晒されたものの何もなく日々が過ぎ去った。最初は客人と云うことで目立つたが、何の特徴もない少年だと片付けられた。

私としてはかなり不服だ。なんだ、少年って。

そして、王子に銀髪野郎が罰を命じられて三日後、恐怖のお勉強会が始まった。

『今日から、私と一緒に楽しく勉強していきましょう』

なにその真顔。真顔で楽しくと言われても怖いだけなんですけど。

『よ、よろしくお願ひします…』

手を握つたままペ「つと頭を下げる。

『では、まず日常会話から覚えていきましょう』

彼の罰と言つよりも寧ろ私の罰だと思つんだ、これは。

結局、レッスンは休憩無しで午前中ずっとさせられた。

・

「やべえ…こんなに頭使つたの、大学受験以来だ…」

理系の私は英語が大の苦手だったため、ほぼ毎日英語をしていたのだが…その苦痛の比じやねえ。なにあの、鬼教師。私はが発音や文法を間違えるたびに電撃を食らわせるとか、体罰だよこれ。

宛がわれた部屋で、黙々とご飯を食べる。今の幸せの時間は食事だけだ。

「コンコン

「はーー」

ついつい日本語で答えてしまつ。

「 、シスター・シャク」

「ゼア！」

慌てて立ち上がった私を銀髪野郎は、少し顔を顰める。

「もつひょつと、まつてくらひやい
もぐもぐもぐもぐ。」じっくん。

「シスター・シャク…」

呆れたように溜息を疲れるが、食事中には言つてはいけないが悪いんだ。

先ほどから銀髪野郎が言つてはいる“シスター”とこものは、敬称である。そして、男性の敬称にはシルアを使う。これは既婚かそうでないかによつて敬称が変わつてくるのだけれども…。ちなみにシア・デュアハンのシアは物などにつける敬称らしい。まあ、敬称と言つていいのかわからないけれど。そして、ゼアは肯定の意味です。つまり、はい、ですね。是と一緒に考へると、すぐに覚えられた。歩み寄つてくる銀髪野郎に、慌ててお絞りのよくなもので手を拭いて、手を差し出す。

『今日から、マジサーディと書つのもしてよことになつてこます』

『本當ですか？』

『…』

「いだだだ…！」

「それ指じやない！爪が刺さつてる…！」

『淑女たるもの、そのような無様な笑顔を見せなによつて無様つて…無様な氣もするけどさあ。

『す、すいません…精進します』

『では、道案内をしますので、道を覚えてください。明日からは、自分でいけるよつて』

『はー…』

私の部屋は一応密間を使つてはいる。広すぎて、最初は侍女や下女が使つている部屋でいいと言つたのだが、なにかあっては困ると却下されてしまった。

『右…左、階段…直線を進んで二個目の角を右…』

あ、やべ、頭こんがらがつてきた。

最初のぼうを忘れてきて、うーうーと唸つていると、銀髪野郎が脚を止めた。どうやら着いたらしい。

「つて…え?」

なにあの人だかり。

目を丸くしていると、銀髪野郎が手を差し出した。人だかりに目をやりながら、手を取り意思疎通を図る。

『…殿下が予想以上に喧伝していくださつたみたいですね』

『…そのようですね』

ちょっとみなさん、ハーダルをそんなにあげないで!やめてー!

『…マッサージと言つものは普通、何分ほどするものですか?』

『…短くて15分ほど…長くて1時間しますが…希望は20分で』

『…一人20分にして捌くにしても、あの人数を午後ですべて終わらせるのは無理でしょうね…』

『…予約制はどうでしょ?』

『…予約ですか。私の国ではないことですね』

貴族優先です。

ここは王国だし、貴族がいるのは当たり前か。

『…毎朝、あの部屋の前に名簿でも置いて、自分の合つ時間に名前を書いていただくとありがたいですね…そしたら、午後には間に合つてしまふし…』

『…もしそれを書いてもらつたとしても、あなた、読めないでしょ?』

『…う』

そうだつたー!一番の問題点は名前を呼べないことだつたー!

『…一応殿下はあなたが異世界から落ちたということは伏せていますが、魔力がなく、私を介さないと言葉が通じないことは、この王宮にいるものは知っています』

感情は何一つ籠つていながら、責められている様に感じるーーー!

『…名簿に関しては私が取りましょ。その後あなたに渡します。あなたはそこで、本国語で振り仮名を振つてください』

もう少し勉強が進んだら、この役を辞めますので、悪しからず。
くつそー！是が非でも言葉を覚えさせるつもりだな！別に嫌なわけじゃないけど、もう少し手柔らかに！と声を大にして言いたい。
『聞こえます。ですが、私はこれでも優しくしているつもりなのですよ』

につこり

心の声をあえて漏らしているのが、王族以外の優しさで、これが最上級の優しさなんですから、文句を言わないでください。言ったらどうなるかは知りませんよ。という言葉が流れてくる。

『……いいですよ、いいですよ。そつちがそんな態度でいるなら、私はもう素でいきますよ』

年上だから、住まわせてもらつてるから、苦労を掛けさせているから、礼儀だから。だから、私は敬語でしおらしく大人しくわがままを言わずに接してきたと言つのに……！

『これからは、どんどん無礼なことを言わせていただきますねと、私はにつこりと微笑んだ。

どうだ、これが淑女の微笑だ。

『望むところです』

ふ、と口角をあげて笑つた銀髪野郎に私の顔の筋肉が固まつた。目の前の男は馬鹿にした笑いだったのに、私の精一杯の微笑が馬鹿馬鹿しいほど完璧な微笑だつた。

これがイケメンと不細工の壁か……！

『とりあえず、あの人だかりをどうにかしましよう』

これから楽しみにしていますよ、と楽しげな声が流れてきたが、私は少し後悔した。

銀髪野郎は人だかりをまとめ、予約制だと言つことを告げ、今日中じや捌ききれない人数の内、明日に回つてもいいというものに予定時間を聞きまわっていた。その間私はその役を銀髪野郎に任せ、部屋の中に入つてせつせと準備をしていた。

まず服を着替えないとな。こんなひらひらしたワンピースじゃ、パンツ見える。

着替え終わつてから、あらかじめ用意してもらつていた数種類の香油のにおいを確かめていく。あのバラの匂いだけじゃ男の人に使えないし。

「あ…これ、いい匂い」

くんかくんかくんか。

そういうしている内に、ノックと共に銀髪野郎が入ってきた。

「…………？」

「ディモゼー！」

大丈夫！

何言つていたのかはわからなかつたけれど、多分もういいか？的なことを言つたんだと思つ。違つたとしても知つたこつちやねえ。

『では、私は一旦戻ります。またなにかあれば、誰かに私を呼んでいるといつ血を伝えてください』

『はい！ ありがとうござります！』

では！

・
・
・
と分かれたのが恐らく時間ほど前。お皿を食べてからぶつ通しだある。

私が寧ろマッサージされてしまふ。

20分間のマッサージと言う時間に関しては、銀髪野郎が置いていた氷の花時計を目印にしていた。時間の概念は違うらしけれど、私の考えた20分があちらの時間の概念で伝わつてゐるから問題はない。この氷の花が薔薇から咲き誇つて枯れるまでが20分らしい。なんともおしゃれな時計だ。イケメンはやることなすことイケメンなのか…。

「最後の人か…」

それでもお腹すいたなあ。今度から3時のおやつ時間とか貰おうかな。

「えっとー、じゃあ… シルア・ケドネス、ピスダ チマツツオ・マ
ルアタ キドウトウ」

ピスダは「こちら・こっち・こ」という意味で、チマツツオは英語で言う *p—r—e a s—e* の意味らしい。マルアタ キドウトウはお待たせして申し訳ありませんという意味。これら二つは、わざと慌てて、帰ろうとする銀髪野郎に聞いた。

「？」

あー、
すいません。
全然わかりません。

皆さん私に色々と話しかけてくれるのだが、如何せんわからない。けれど諦めずに話しかけてくれる皆さんに涙が出来ただよ。おひるう。

「キスク？」

キスクは名前だった気がする。ということは名前を聞いているのか？

「え、えと、トモス、ヴィ、シャク」

私はシャクです。

これくらいなら言えるよ！典型的な言葉は先にバンバン教えられたからね！文法とか抜きに！

「 シヤク?

たぶん変わつてるとかそんなんだと思つ。

「シーヴァルア・ケドネス」

ケドネスが苗字だったから、シーザーヴァルアは名前かな。

「ピッオアサクテ！」

ようしくお願ひします！

1

ケドネスさんにマッサージを施して、花が咲き誇っている頃、ドアをノックする音が聞こえた。

「ゼア、

「うとうとしているケドネスさんに悪いので、小声で答える。ケドネスさんの背中を一生懸命マッサージしているところである。そんな私はケドネスさんの背中の上。必死で横からしている私に見かねたのか、ケドネスさんが私に乗れと言つたのだけれども。

「シスター・シャク ……？」

驚きに目を丸める銀髪野郎を見て、私の目が丸くなる。
『え、なに。背中に乗るのは非常識なのか？

すつ飛んできた銀髪野郎に手を取られる。

『え、なにか悪いことでも…』

『どうして、彼がこんなところにいるんですか？』

『え…名簿に載つていましたけど…』

銀髪野郎は顔を顰め、心地良さそうにしているケドネスさんを見下ろした。

『彼は…騎士団団長、シーヴァルア・ケドネスです…』

『へえ、そうなんですか…』

『馬鹿ですか、あなたは…こんなところで団長が寝ていていい訳ないでしょー!』

電撃ではなく、今田はおでこを平手で打たれた。

パシーン!

『地味に痛い…』

『あなたはもう…』

『いいかげん、しゅぐじょらじくしたらビツですか』

『…?』

『え？！ちょ、今、日本語喋つた？！

口をパクパクさせる私に銀髪野郎は呆れたような顔をする。

『あなたは勉強している間、考えたことを発しているんですよ…私も意味くらい理解できます』

私があなたの国の言語を覚えるまではが早やつですよ…。

な、なにおうへー！

勢い余つて銀髪野郎に頭突きを食らわしていくと、

「ん…んう…」

ケドネスさんが田を覚ましてしまつた。私が慌ててケドネスさんの上から退こうとするが、銀髪野郎が私の手を掴んだまま、逆の手で額を押されてふりつき、よろめいた拍子にケドネスさんの上に手をついた。

いいから離せ！

『なに人の背中でイチャついてんだよ…』

背中に手を置いていた私は、ケドネスさんの言葉が一語一句間違わずに伝わってきた。

非常事態だから！

『す、すこませんー背中の上で騒いでしまってー。』

『やべ、幻聴だよ。あいつの呪いか？』

あいつが誰だか知らないが、呪いじゃないです。

『あなたと言う人は……非常識極まりない人ですね！なにをビリ
したら、私に頭突きをするという結論に至ったのですか……』

『だから、これから素でいくつて言つたじやないですか！』

どんどん手が出ますからね！

ケドネスさんの上で踏ん反りがえつてこると、ケドネスさんが寝
返りを打つた。

「ちよつ……！」

落ちる……！

土台を失った私は銀髪野郎に助けを求め、手を伸ばした。といつ
か、寧ろ飛び移った。

『な、やめてください……』

『非常事態だから！我慢しろよー。』

『嫌ですよ！……そもそもあなたは女性と云つことを意識しなさー

ー！』

『女だと思つてないのはどこのどこつだー。』

「……」

田を「じじ」し擦りながら、無言で暴れまわる私たちをケドネスさ
んは不思議そうに眺めていた。

『とりあえず、降りてください……。』

「つぶー！」

額をパーンと平手で打たれ、勢いで仰け反った。そのまま銀髪野
郎にしがみ付いていた手が離れ、私は背中から倒れた。

「うぐうー！」

頭を打たなかつたのは幸いだったが、背中を強打した。息が一瞬

詰まり、苦しそうにた打ち回った。のた打ち回る私の手を銀髪野郎無理矢理取り、ケドネスさんとの会話を成立させようとした。

ちょ、乙女が涙目で苦しんでるんだから、少しほは心配しろよ。…。

乙女と言つたものの23の女はもう乙女じゃないと思つ。

『は？なんだよ、これ』

ケドネスさんは不審そうに銀髪野郎と繋いだ手をぶらぶらと振つた。

『ケドネス団長、彼女と会話をするための手段ですか』

『ああ…お前の魔術か』

銀髪野郎は魔術を使って私を起しし上げ（しかも雑）、ケドネスさんと手を繋ぐように訴えかけてきた。

『痛い…マジ痛い。この国にはレディファースト…じゃなくてフュミニーストはないのかよひ』

フュミニーストもなんだか意味的に合つてない氣もするが。

『貴女、何を言つてるんですか』

レディーファーストやフュミニーストと言つ概念はあるかもしないが、向こうの言葉に変換できるものはないのだろう。だから、銀髪野郎が日本語で呴いていたところを見るに、そのまま日本語で伝わつたみたいだ。

ああ…また意味を理解して覚えていくのだろうか…。

『で、俺はどうして会話をせねばならない？』

私と銀髪野郎の会話をぶつた切り、ケドネスさんが最もなことを聞く。

『私は不本意にも彼女の教育係をしているのですが、仕事上の都合で週に一日ほど行つことが出来ません。その時間を、あなた方騎士団に任せたいと思いまして』

不本意てなんやねん。誰のせいやと思てんねん。

『はあ？』

おいおいおいおい。私はなんも聞いてないぞー。

私の気持ちは伝わつてゐるはずだが、銀髪野郎は私のほうを見向

きもしなかつた。

つけ。

『なんで、俺がガキの子守をせにゃならんのだ』

寝台の上で胡坐を組み、不服そうな顔をするケドネスさんに銀髪野郎が満面の笑みを浮かべた。その笑顔に青くなつた私と同様に、ケドネスさんの顔も引き攣つた。

『副団長の許可は得ています』

『げ』

『今日、副団長はあなたをお探しになつていまして…それはもう立腹のようでした』

ケドネスさんの満面から考えるに、日常茶飯事のことなのだろうけど…団長つてそんなに自由な行動をしていいのだろうか？部下といふか、兵士の強化とかは団長の役目では…。つか、副団長に怯える団長つてどうなの。あー、だからこそその人は副団長なのか。恐るべし、副団長…

『副団長が言つことは、『その客人が団長の逃亡を阻止できるなら、騎士団に置く』ことを許可しましよう』との事でして

なにそれ！知らないうちになんか巻き込まれてるんですけど…！

団長の行動とか阻止できるかっ！

『だつたら、尚更許可できるかよ…』

『ああ、そうでした。許可と得にきたわけではなく、『報告』でした。申し訳ありません』

『じつ…！

銀髪野郎の腹黒さに感服するほどポカーンとしている私を銀髪野郎は一睨みし、ケドネスさんにもう一度微笑む。

『今日は私もあなたを探すのにかなり時間を割くこととなつてしましました』

あれ？疲れで目がおかしくなつたかな？銀髪野郎の背後に禍々しいものが見えるな…。ああ、なるほど。これが魔力つてやつか…。

現実逃避をしていくと、ケドネスさんは苦悶に満ちた顔をし、呻

き声をあげなあがら小さく頷いた。

『…好きにしる』

『ありがとう』ゼこますね』

銀髪野郎は作られた笑みを浮かべ、ケドネスさんから手を放した。

『さ、帰りますよ』

『え？迎えに来ててくれたの？』

『あなたの頭じゃ、どうせ道なんて覚えていなこと思こまして』

『あとで覚えとけよ！この銀髪！…』

『なんですか、あなたは見た目で人を差別するのですか？あと敬語はどこにいったのですか』

『たつた今なくなつた！』

『あなたは私より年下でしょう。最低限のマナーだと思いますが』

『もし私が年上だつたらどうするよ…』

『せつてーそれはないだうかど…』

無言で手を繋ぎながらギリギリと睨みあつ私たちは、傍から見た
りや相当おかしいのだろう。ケドネスさんはなんとも言えない顔を
していた。その顔に気付いたのか、銀髪野郎は行きましょうと言つ
た。

「キヴォイア・ケドネス、トリヴォータ」

「とつぼーた！」

トリヴォータはさようなら・また明日・今度・お元氣で、といふ
意味である。キヴォイアは恐らく敬称であるシスタでないのを考え
ると、団長とかそういう意味なのかな？

ケドネスさんを見ながら、銀髪野郎に手を引かれる。もつりよつ
と歩く速度落としてくれたつていいのにな。

「…トリヴォータ

疲れた顔のケドネスさんを見て、そう言えばまともにマジサービ
してやれなかつたな、と少し後悔した。

負け犬の遠吠え

ケドネスさんと別れ、王子に今日ひついて報告する」とがあると言われ、ずるずると引き摺りれるようにして連れて行かれたのは王子の部屋だった。

『え？ ガチで王子部屋？ 応接間とかじゃなくていいの？』
『殿下が、応接間だと盗聴の可能性があるので、私室で話すと仰っていました』

別に聞かれても困るようなことはないと直つて、殿下はぱりとしてこんなのを私室に連れ込むなんて仰るのでしじうか…。心の声聞こえてるけどー、いいんですかー？

「ミゲリアナ、シャク」

ドアを開けると、少し緩い格好をした王子が微笑んで挨拶してくれた。

「ミゲリアナー・セシルタ…セシルタ…」

あ、れ…。王子の名前、なんだつけ…。

ちなみにミゲリアナはこんばんは、という夜の挨拶で、セシルタは王族専用の敬称。女性の場合はセシスタである。

「シャク…？」

「えー、えつと…」

王子の名前、名前、名前…えつと、なんだつけ、その、おこしそうな名前…そう、おこしそうな…。

「セシルタ・ドリアー！」

バチン…！

「つ…！」

今まで以上の衝撃が全身を貫いた。目の前がちかちかして、思わず膝をつく。

「つか、はあ…」

息が詰まり、必死で呼吸を繰り返した。

一
六
一

咎めるような声を出した王子に抱き起された、ソファに座らせられた。On the 王子の状態で。ぐつたりした体で抵抗するものの、ものの見事にスルーされて終わった。

大丈夫？

王子は私の頬に右手を当て、左手は私の体を支えている。両手が塞がっているのに、何故声がと思ったら、ソファの後ろから銀髪野郎が私と王子の体に触れていた。

『クーは手加減というものを知らないくてね』

心なしか、呂律が回らない。前の薬といい、ここの人たちは唐突に

だ
な、
おい！

名前、覚えてなかつた?

ギンと私に向けられていい

じゃない。

発音が悪いのは「愛嬌つて

発音が悪いのは、愛嬌で事で

……では、われの名前も覚えてないんだよね。」

郎だった。なんとなくやばい気がしたので、私は王子の上から降り、姿勢を正した。恐る恐る手を差し出し、一人を繋ぐ。後ろから前に回ってきた銀髪野郎は私の左隣に座つた。

『……その、申し訳ないんですか』

7

銀髪野郎は気にしていないのか、何も言ってこなかつたしガンも

つけてこなかつた。

もしや名前を私に呼ばれたくないって事だろうか。

『でもそれじゃあ、不便でしょう?』

『あ、え、ああ…』

な。意するなど思はれたること一セイには名前呼はれたくなしんた

『ここまで覚えてる?』

……その……ケーーと

いやああああああああ！ そんなに睨まないで！ 私だつてあんたの愛称呼
ぶなんて思つてないよ！ 呼べるのは王子だけだと思つてるし！ だか
ら、そんなに睨まないで！ 石化する！

『じゃあ、いいじゃない。呼べるよ』

四

二人の懲痛の歎が響く。五十九歳の晩未でな!!

『え、なにか駄目なの?』

私は駄目です！確実に殺される！

『私はこのよのうものに愛称で呼ばれたくはありません！そもそもクーというのは愛称でもありません！殿下が勝手に呼ばれているだけです！』

このようなものってなんだよ！何様だよ！

なはそれ
儀が悪いの

卷之三

ぐぐぐと歯が折れんばかりに口を噛み締めている銀髪野郎に沸々と仕返ししようと言つ悪戯心が湧き上がつてきた。そんなに私に

名前を呼はれるのが嫌なんだな……？」

「ふははははははー！ 精々私に愛称で呼ばれて悔しがることだなー！」

ソーバから立を上かで 左手を腰にあて 右手をビシリ!と上
から銀髪野郎… もといクー… クーさん? クーちゃん? クー君? を指

差す。

クー君はねえな。

「あなたは…」

王子を放置して、日本語での会話。
なんかさつきより上達してつゞ、こいつーしかも発音がネイティ
ブに近付いてる…

「明日の授業…覚えておきなさい…」

下から睨みつけられるも、今の私には脅威ではないわ！

「つは！負け犬の遠吠えだな！」

くけけけけけ、と氣色の悪い笑い声を上げる私を見ながら、クー
さんは顔を顰めた。

「まけいぬのとおぼえ…」

テレレレッテレーン！クーは新しく“負け犬の遠吠え”という日
本語を覚えた！（ただし意味は今はわからない）

『ちょっとー、母国語で会話しないでー』

『ぐえつ…！』

背後から抱きつかれ、私はクーさんの体にダイブしていた。
クーちゃんは飲み物があるので、愛称はクーさんに落ち着きそつ
だ。なんだか釈然としないが、年上だし、ここは譲歩しよう。
『殿下…！お退きください…！』

『えー、やだー』

子供か！

『子供じゃないよ。だつてもう25だよ？王位継げちゃうよ？まだ
まだ未発達のシャクには言われたくないなー』

『つてどこ触つてんだ！！』

もぞもぞと動く手は徐々に前のほうに向かってくる。

ちょ、こんな堂々とした痴漢しらねえ…！

『殿下！たとえ、彼女が少年に見えよつとも体は女性ですーもしこ
のことがばれたら、殿下の評判が下がりますー！』

本気で焦るクーさんだが、私の体と王子の体を押しているだけじ

や、意味ないよ。つか、気にしてるのは評判だけか。女子を助けるよ。

『わかつてるよ、本気にしないで』

『というか、私は別に未発達じゃないです！もう成熟します！』

『ええー？』

抱き込む力を抜いた王子だったが、そのままぐつたりと上に覆いかぶさってきた。

『重いわ！！』

『クーさんならわかりますよ！お風呂入ってる時、見たでしょ！私の体！』

『！！』

ほら、証明しろ！と顔を上げたが、クーさんは顔を引き攣らせただけだった。

『二人はもうそこまで仲良くなれ』

『最後まで話を聞け、馬鹿王子！』

後ろに手を回し、王子の長くて綺麗な金髪を思いつきり引っ張る。目の前のクーさんの眉が寄つたが、そんなこと知つたこっちゃねえ！。

『いたたたた』

『私は23歳です！』

きゅぴんと固まつた二人に、やつぱり…と私は盛大に溜息をつく。私は脱力して、クーさんのお腹に顔を埋めた。

くつそ、イケメンだからか、いい匂いがするぜ…。

『…やけに体が成長している少女だから、その、マッサージ師といふのは建前で…娼婦だと思つていましたよ』

『2つしか変わらないんだ…』

変わらないんだと言つて、このクソ王子は人の乳を揉みしだいた。

『うおおおい！』

『で、殿下！』

『わ、意外とある』

あれから、王子には悪いが思いつきつ段らせていただいた。ビンタなんて可愛いものは嗤嗟に出ない私なので、背後の王子にエルボーを食らわせてしまった。クーさんも王子が悪いと思つていいのか、電撃でのお仕置きはなかつた。ただ、寝められた。そして、『…今日は帰りなさい。後の報告は私に任せておきなさい』と言われたのが昨日。そして、今日は待ちに待つてない騎士団に預けられる日である。預けられるつて表現はちょっとアレだな。うーん、少しの間隔をせてもうらうじよう。

「ほんにちはー…」

恐る恐る騎士団の演習場や宿舎などがある門を開くと、門の傍に経つていた少年と目があつた。

えつと…どうも…

「…？」

「えーっと…ちょっと待つてください」

今日はワンドピースじゃなくて、ズボンを穿かせていただいた。ズボンなんてものは男しか穿かないらしい。機能性はスカートよりも思つうんですけどね。そのポケットからクーさんが書いた紙を取り出す。私には護符に見えるけど。

「ピッオアサクテ」

そう言って渡すと、少年は目を真ん丸くしてなにやら呟びだした。

「…！…！…～～～！…」

少年の絶叫にわらわらと人が集まつてくる。みんな遠目で私を見つめていたが、少年の言葉で目を丸くしてどよめいている様だつた。

「…」

低い声が聞こえたかと思うと、さつと人ごみが割れた。モーセの十戒みたい。あれ?違うか。十戒じゃないか。

「…」

「ピツオアサクテ」

なんだかかなり偉そうな人なので、一先ず挨拶を。短髪の茶色い髪が素敵。やっぱ、男子たるもの短髪よね。というのは私の偏見です。前髪が長い男子が嫌いなのです。いや、前髪だけじゃなくて襟足が長い男子も嫌いです。嫌いと言つたか好みだけなのだけね。

「トモス ヴィ つ…」

私は、と言つたところで、彼は誰かに呼ばれた。声のするほうへ顔を向けると、かつたるそうなケドネスさんがのっしおっしおちらへ歩いてきていた。

「…」

田の前の人の中く禍々しい声に周りの温度が冷たくなる。田をパチパチさせている私以外の騎士団の方々は、肩を抱いて体を震わせていた。

もしや、この方が副団長さん?

「ピスダ」

「ん?」

近付いて来た団長さんになにやら紙を渡された。

「クーラードヴォゲリア」

「クーさんからだと書いとどだらうか?えー、なになに?」

「つて、日本語!?」

え、ちょ、なん?ー!全部ひらがなつーとこうがなんだか笑いを誘うけれど、どうして日本語?ー

「あ!」

そう言えば、この前あいづえお表を書かされたし、発音もせられた。ついでにカタカナもあるんだよーって書いてあげた私馬鹿じやないの?ーいや、馬鹿じやないけどー

「…?」

「イエ、ナンデモナイデス」

副団長になにやら聞かれたが、なんでもないと答える。一ユアンスでわかるつしょ。

はいせい せうり ど

なにこれ！なにじこと？！むしろ、じうやつて、摔啓とか殿つてい
う言葉を覚えた？！…あつ！…そう言えば、クーさん、私のボストン
バック漁つてたな！

ホストンハーグの中には衣類や洗面用具のほかは
たっぷり入つていたのだ。その資料に、森 桜 殿 という言葉は
書いてあつたけれど……。

読めたの？漢字を？

： 奴の研究の熱の入れ方が日本語に注がれている気がしてならない。早く日本へ返すことに力を注いでもらいたい。 急に笑い出して考え込みだした私を副団長が目を細めて、見つめていた。完全に怪しんでいた。

ちょっと引き攣った笑みを浮かべた後、私は慌てて手紙を読み始めた。

はいせい せうり どの

あなたは、われわれの、くにの、じとばが、わからぬいため、にほんじの、めもを、かきます。

さよ、うば、きしだんに、いても「うば」とことなるですが、うばが
つうじないため、まだなにもできないから、したうばの、くいじと、
うまの、せわしていただきます。

あなたは、なにかを、していないと、いやだと、いうから、うまのせわをして、いただく、でも、いやだったら、しなくて、いいです。くれぐれも、ふくだんちゅうじ、めいわくは、かけないよ、こ、しましょつ。

「ほんと、あとで、あつてこなが、きかせてください。

けいぐ くーりじまつりあ

「…くーりじまつりあ」

なにこれ、ネタかよ。弄つていいの？これから、なにかあつたら
これネタにしていいの？あと、副団長の前だからって笑い堪えてる
けど、もちやうになじよ。

とこうか、やつぱりこいつ、日本語に興味津々じゃねえか。

「？」

「えーっと…」

たぶん、なんて？と聞いているんだろう。
なんか答えないと、と思つて手紙をもつ一度見返すと、“つにし
ん”が書いてあつた。

「」の「とばを、ふくだんぢょつこくべば、いいです。

ともす りりもーた にき りじり みす むべ ゃるでー
あさる

ひらがなばっかりで読みずれえ。

「えー…トモス らりもーた にき りじり みす むべ ゃるで

いー あさる」

「…ゼア。 …」

「ゼア！」

副団長は肯定の意を示した。どうやら、馬の世話をしてもいい
ところのことだ。そして、誰かを呼んだ。

「…！」

ビシ、と副団長の前で敬礼を（日本とは違つボーズ）した兵士は
そばかす塗れの青春真つ盛りであつ少年だった。17-8くらい
だろうか。

「アーバン」

七つやひ、今日の馬パートナーは彼らしい。

艶かしい人

「 つ！！」

「 へえー、 そ うなんだー」

「 ？」

「 んー、 どうだろ？」

少年と手を繋いで（なんとかは知らないけど、たぶん子ども扱いしてることだけはわかつた）、馬小屋の前まで私たちは歩いてきた。日本語変換では馬ということになっていたけれど、小屋の中にいたのは明らかに馬じゃない。なにこれ、怖い。目が金色で黒い毛とうところはカツコいいのだけれども、その鋭い牙と唸り声のような声は何だ。仰天している私を他所に、言葉が通じていないということは丸無視で、説明をし始めた彼。名前が、ナツツオ・カーベルトだと言うことだけはわかつた。そして現在進行形で、小屋の掃除をしながら、彼はマシンガントークを吹つかけてくる。

「 シャク、 ドルマン？」

「 ドルマン？」

えーっと、ドルマンってなんだっけな……この前この単語覚えたな。

「 トモス ヴイ トクトマ！」

「 トクトマ？」

えーっと、トクトマは数詞で……アイ、ヴィ、トクトマ、ラリオ……0か。あー、ドルマンは年齢だった。つまり……

「 君、二十歳なのか

少し驚いた顔を見せると、満面の笑みを見せた。どや顔されても、私より年下なんですけどね。

「 トモス ヴイ トクトマ・ラリオリイ」

というと彼は目を丸くして、口を大きく開けた。

「 ！！」

言葉は通じてないが、確実に私を馬鹿にしている言葉だと叫つこ

とはわかる。叫び終わると、ナツツオは私の胸をガン見し始めた。
あんたこれ他の女の子にやつたら、ビンタくらつても文句言えん
ぞ。好きな女の子だつたら確實に嫌われるな。

いつどのタイミングで殴つてやろうかと思案していると、馬と日本語変換されるテキリトスから低い禍々しい悲鳴のようなものが上がつた。

「「？」

一人して馬と日本語（省略）の方を見ると、妙に艶かしい人が馬の上に乗つていた。いや乗つているという表現は違う。馬の上に立つていたのだ。

「は？」

私が田を点している間に、ナツツオは血相をえて馬の許に飛んでいった。乗つていた人物はナツツオを馬鹿にしたように、近付いた瞬間飛び上がって馬の上から消えた。消えたと思つていたら、私の目の前に重力丸無視で、少し浮いた状況で立つていた。

「やあ、どうも」

「ど、どうも… って日本語？！」

「想像と違うなあ。少し、幼い」

「それは聞き捨てなりません」

「そう？」

声を聞くと、艶かしい人は男性だとわかつた。いやあ、フェロモソというかなんかこう腰に来る様な顔と声と雰囲気と匂いといいますか…変な気分になりそうだ。

「俺、神子なんだ」

「へえ…巫女さんなんですか」

「ん？」ということは女性なのか？

「だから、言葉が通じると思つてくれればいいよ」

「へえ…」

そう言えば、ナツツオはどうしたんだうーと彼の背後を覗いてみたら、後ろは馬小屋ではなかつた。

「は？」

バツと、改めて辺りを見回してみると、白い神殿のようないく間に私は立っていた。

「魔法？！テレポート？！」

「この国にある魔術と、俺が使える力は違つ。俺の力は神子にしか使えない」

「巫女さんって凄いんですね…」

日本の巫女さんは、もう邪な田線でしか見れませんよね。コスプレ的な意味で。

「君の名前は？」

「え？ 知らずに連れてきたんですか？」

「クーラード・ヴォゲリアのお目付きだつたら見たいものでしょ？？」

「クーさんが関係してくるもんなんですか」

「クーさんね…じゃあ、俺のことはナチさんって呼んで」

「ナチ、さんですか」

「ナチア・トウーマ・ルイアナ」

「…ナチさん」

話しているうちに、私はまた移動をしていた。白い神殿だつたはずなのに、白いけれど少し薄暗い部屋にいた。

「なあ！」

「ここ、どこですか…？」

一步一歩近付いて来るナチさんに対し、私は一步一歩後ろに下がつていぐ。

「どうして逃げるの？」

「ナチさんの色気で変な氣が起つたからです」

「起こしてもいいよ？」

「それは困りますよ」

「なんですか？」

「ぐん、と一気に距離を詰めた彼は、私の肩を掴んで体重をかけて

きた。私と共に彼は後ろに倒れこんだ。

「ふえ！」

「色気ないなあ」

「ナチさんか、ありすぎなんだと……」

白い綿のよくなべツトの上に私は倒れていた。……ここは彼の寝室か？
く。

「寝室、ですか」

「そうだね。俺の寝室」

と言いながら、彼は魔法のように私の服をすくすくと脱がしていく。

「脱がす必要がどこに……？」

わかつていて聞いてしまう。

なんでだろ。ヤバイとわかつてゐるのに、彼の目が雰囲気が色気のせいなのか、身動きが出来ない。

「もしかして生娘？」

「違いますが……」

「じゃあ、わかるでしょ」

破らずに綺麗に紐解いた服からは、晒しで巻いた胸が現れた。この世界に来てから、ブラジャーはつけていない。他の女性がそういうものをつけていなかつたからだ。

「いづやつてや……」

きつく巻かれた晒しを解き、現れた始めた肌に彼は指を這わせた。

「キモチイ事、することぐらー」

彼は私の胸を手におさめた。

…あじべりに聞こなむ（前書き）

JR東日本の描画なら1~5禁の範囲ですよね...?

アセントでしょ? かね?

特に盛り上がるところはないで

…あじぐらい閉じなさい

「えええええ、と…」

一心不乱に私の胸を揉みしだいている所悪いのだが、非常に殴りたい。私には貞操観念と言うものが存在していましてね…。では何故殴らないのか、と聞かれれば一つある。まずは、体が目の前の人のが何なのか、体が動かないものである。これは非常事態だ。そして次に、巫女だからという点もある。巫女さんって殴っちゃあいけないでしょ…なんかまずい」とになりそうな気がする。

「変な子」

「そう、ですか…？」

「神子つて聞いて目の色を変えないとこひが」

これは、クーラードヴォゲリアが気に入るかもしれない…原因?と独り言を交えつつ、胸を揉む。

ちょ、やばい。ガチで変な気分になつてきた。

「そして、髪も短い」

するりと長い手が私の鎖骨をなぞり、首に顔に手が移動していく。ヤバイ、これはヤバイ。誰か助けて、マジで。かなり冷や汗が出ていて、背中のシーツ辺りが冷たい。

「顔、強張つてる」

「ぎょえええええ！」

頬を舐められ、驚きと恐怖と羞恥が混ざり、変な声が出た。

「…まあいいや」

「ちよちよちよちよ…！」

その太股に置かれた手をうえに持つてくるな…！

「だ、駄目つ…！」

「大丈夫。俺、子供作れない。神子の力の影響で」

「んなこと言つてねえよ…！」

駄目だ、こいつ…根本的に考え方が違う。

「…どんな声出すかな」

「つひ！」

お前…！

もう駄目だ。私はこのままこの男にやられる。助けを何度も望んで
も、誰も現れない。いや、神子の寝室とか容易に入つてこれる場所
じゃないんだろ？けど。

「…つは、つは」

「…も、いい？」

「嫌です」

「挿れるね」

ああああああ、駄目だ！こつなんとかしないとつて…私が！

「無理無理無理無理！！！」

バーン…！

「「つ…」」

私に挿入されたものが立てた音じゃない。寝室にとんでもない音
と風が巻き起こり、強烈な光が放たれ、相手の動きが止まつたこと
で私はなんとかギリギリ免れた。

「…ふう」

「誰だ」

ナチスだっけ？いや、違う。そんな悪そうな名前じゃなかつたよ
うな…が低い声で相手を威嚇すると、高らかな笑いが聞こえてきた。

「この声は…！」

「王子…！」

「シャク、

「ごめん、わかんない！でも、どうしてここに…？」

天蓋を捲り、笑顔の王子が入ってきた。

ちょ、私、股開いたままなんですけど…いい加減、体を自由にし

て！！

「クー、

「ゼア」

「シャク」

嫌そうな顔をする神子に対し、満面の笑みを浮かべた王子は神子殿の胸倉を掴み上げた。そして、天蓋の外へ引き摺つていく。

王子へ神子なのかな？王子へ神子でも、王子は気にしてなさそうだ。

「…あしくらい閉じなさい」

「あ、クーさん…すいません、体が動かないんです」

後から入ってきた、クーさんにかなり呆れられた。でも、仕方ないんだ！体が動かないからね！

「あなたあの男の目を見たのですか」

「え…見ましたけど」

「…それで上げるものも上げられなかつたのですね」

王子なんか、俺は胸をさわってぶんなぐられたのに…。とか言ってましたよ。

そう言つてクーさんは私に手を翳した。一瞬、私の体が光つた後、私の体が弛緩し、脚がなげだされた。体の自由が戻つたのだ。

「…助かつたあ」

「一応、貞操観念はあつたんですね」

「乙女に失礼な」

クーさんに全裸を見られているのはかなり居た堪れないでの、汚れていないシーツを取り、体を包む。

「そう言えれば、日本語うまくなりましたね」

「…ちよつとがんばりました。話し方に関しては、お手本と並び名のあなたがいますから」

それはお手本になれるところから、私を褒めてんのかなんなのか。

「手紙からの上達っぷりが尋常じやないですよ」

「…やっぱりへん、だつたでしょうか」

「…片言でしたね」

「かたこと…」

私の肩に触れ、もう一度言えと言ひ。どんだけ勉強熱心よ。

『片言、ですよ』

『ああ、片言ですか…。片言を日本語で言ひつと「片言」なんですね』
全部片言つて言つてるけどね。

と悠長にクーさんと話していると、外から凄い音が聞こえてきた。

「え…何事?」

王子と巫女…なにしてんの。

「…彼らは幼馴染なんですよ。だから、すきんしつぶとでも言いま
しょうか」

「…へえ」

天蓋をクーさんが捲つてくれた。天蓋の外では、王子が剣を持つ
て火を纏つていた。一方、巫女は訳のわからないオーラみたいなも
のを纏つて、ぶつかりあつていた。

「魔法 vs 超能力みたい」

「い」のはまほつ、ではなくまじゅつです」

「まじゅつ、ね」

クーさんに睨まれたからもひつ言ひつをやめよう。喧嘩でも見てい
よつ。

笑顔の王子（黒笑み）vs不機嫌な艶かしい巫女。どっちが強い
のだろうか…。なんて思つていてがすぐに決着はついた。国一番の
魔術師と呼ばれるクーさんが強制終了したからだ。

仲間はずれいぐない

ここで問題です。私が全裸のまま正座をせられているのは何故でしょう。

「貴女と言つ人は、ききかんと言つものが無いのですか？」

答え。王子と巫女の説教は放置し、クーさんに私が説教されるからです。ちなみに全裸と言つても、シーツは巻かせていただいりますよ、はい！

「…危機感を漢字にも出来ない奴に言われたくないですよ…」

脚も限界になつてきたし、全裸と言つ乙女には辛い所業により、私は下からクーさんを睨みつけながらそう言つてしまつた。その言葉にクーさんは一瞬詰まつたが、その後いつもの顔に戻つた。

「そうですか…。漢字がわかれればよろしいんですね？」

やべえ、こいつは確実に数日で漢字をマスターしやがるぞ…。電子辞書、見つからぬようにしないと…。むしろ、見つかっても使い方を教えないとか電池を抜き取るとかのことはしないと…。

「…！」

「…ゼア」

互いに睨み付け合つていると、拘束されたまま放置されていた王子がついに痺れを切らして暴れ始めた。その横で迷惑そうにしているナチさんは未だに大人しく拘束されていた。

クーさんが真顔のまま私の前にしゃがみ込み、何事と若干怯んだ私はイラついた顔を見せた後、少し手を翳した。その一瞬で、私は服を着用していた。

「すげえ…」

「たちなさい」

THE・命令形！知つてたよ、クーさんがそういう人なくらい。

私は立ち上がり、二人がいる所まで歩いていく。そして、そこにしゃがみ込み、クーさんが一人の拘束を解いたところで、三人仲良

く手を繋いだ。ナチさんは繋がなくても日本語通じるから、輪の外で一人座っていた。

なんだろう、この可哀想な図。

『シャク！どうして、こんな男に体を許したんだ！』

『許してません。断じて許してません』

「えー、結構濡れ……黙れ！」……はーい

この思念派的な会話すら巫女さんは聞こえるらしい。つーか、巫女つて神に見も心も捧げた人のことを指すんじゃないのか。こんなに下半身緩々でもいいのか、これ。

『みこつて何？』

『は？』

急に王子に疑問をかけ投げられ、うつかり敬語を忘れた。

『今、シャク、こいつのこと“みこ”って考えたでしょ？』

『え、巫女つて変換できないのですか？』

まあ日本語じゃあ巫女つて女性のことを指すしなあ……。

『シャクのみこ』を「こいつの言葉で変換すると、神に仕えて云々の女性つてなってるよ』

『……後で辞書で調べます』

『……辞書？』

げ。

油の注していらないブリキの玩具のように、私は右手を繋いでいる人物をゆっくりと見つめた。

『辞書、あるのですか』

やべえ、やべえ。しくつた。マジでしくつた。この人に一番持つていることをばれちゃいけない代物だった。

『そそそそ、そんなことよりも、ふふふ、一人はどうしてここへ？！』

無理は話題転換だつて、自分でもわかつてる。わかつてるけど、仕方ないじゃないか！……だつて、あのクーさんがだよ？！あの、クーさんが一やりつて笑つたんだよ？！笑つたんだよ？！顔の表情筋

まだ動いたんだっていう驚きだよ！！

全部筒抜けだと言うことを忘れていた私は、右半身が不隨になるかと思うくらいの電撃を食らった。

今度からホント、考えることを自重しよう。

『いやだつてさー。騎士団が大騒ぎになつてたんだもん』

『だもんじゃねーよ。可愛くねーよ王子。』

『ナツツオ君が知らせてくれたんですか？』

『違います、副団長です。彼が式紙を飛ばしてきました』

この式紙つて日本語変換だと式紙になつてるんだろうけど、魔術的に言うと使い魔的な飛ばしててきたのかなあなんて推測してみたり。

『彼が貴女が“色欲の君”に連れ去られたと教えてくれたのですが、運悪くその時殿下がいらつしゃつて…』

『運悪くないでしょ。運よすぎでしょ。』

全裸の私を放置して神殿丸焦げにしようとする人がその場にいたことを運がいいなんて口が裂けても言えないわ。つーか、色欲の君とかなんなのネタなの？ウケるわ、マジで。

『つまりは、クーさんは思いつきりとぱつちりつてことですね』

『まったくそうです。だから、どうして貴女は』

『ねー、もお話終わつたあー？』

クーさんの小言を遮つたのは、事の発端であるナチさんだった。

『俺、もう飽きたんだけどさ』

「…」

クーさんの呆れた声。

クーさんは彼が子どもの頃を知つてゐんだろうな…。そう考えると、不憫だなクーさん。こんな位のたけえ我儘破天荒な一人を恐らく押し付けられていたんだろうし…。

温かい目…と某ネコ型ロボットの目をしてクーさんを見つめいたら、思いつきり頬を抓りあげられた。

『その顔をやめなさい』

「いだだだだだ！」

なんでだ！いつもは電撃じゃないか！どうして今回は物理攻撃で来るんだ！つか、マジで痛い！ほっぺた捻じ切れるううう！

『愛嬌のある顔が不細工になる前に、これから注意しておきなさい』

かも、日本語で言つてこなかつたといふを見ると、愛嬌とか不細工
つていう言葉がわからなかつたんだろ、バーカ！

「おまえがまた捕らわれて いる事は 何時 何刻 で ない か で ある が 」

王子に助けを求めるものの、両頬を抓りあげられて涙目の私を見て爆笑するだけだった。こんの役立たず！

でさあ、つていう接続詞が理解できなければ、とりあえず一言。テメエはこの状況を見て物言え。この状態でお気に入り？笑わ
すな！

?

巫女の声は私にもクーサンにも聞こえていて、じれを見ると、聞く人の言語に合つらしい。凄いな神様。無神論者だけど。「じゃあ、どっちなの？」

クーさんはナチさんに向き直る瞬間手を放した。いきなり放され、そのまま倒れこんだがクーさんの魔術かナチさんの神の力か知らないが、床にぶつかる直前で私の体は止まった。

?

「いーや、これから俺の行動にかかるつてへりー?」

クーさんの言語についていけない私は、王手と戯れようかと思つ
二ナレバド三ナは眞利は眞ミヽ二二ノの「皆古ニ聞ハニハニ」。

たけれど、王子は真剣な顔をして一人の会話を聞いていた。

「どういふんだよ？」

「…」

「へえ、セリフ

その言葉に口元を上げたのは王子と巫女だった。
一人とも悪そうな顔をしてるなあ…。

「じゃあ、遠慮なく」

すたすたとクーさんの横を通り過ぎて、座り込んでいる私の前に
ナチさんは座り込んだ。

「ねえ、シャク」

「はー」

「元の世界に戻らないで、俺の伴侶になつてよ」

「は?」

「い、いつ、何言つやつてんの?」

「

やばい、打ち首？火炙り？水責め？

ツゴー！

とりあえず、右手が出てしまった。

「つづー…」

小奇麗な顔が苦痛に歪むのは少し優越ものだが、殴った後で後悔した。

巫女殴つちやつたよ、おい！

「じじじじじじ、『めんなさい』

ビンタなんて可愛いものじゃなく『めんなさい』！

「大丈夫ですか？痛くないですか？」

つて痛いだろうな。

「…なんで殴るかなあ」

「なんでつて…正氣がどうかを確かめるのと、イラッとしたのと…」

まあイラッとしたのが8割方占めているのだけれども。

「なんでイラつてするの？」

「なんでつて…」

適当に求婚するような男に、怒りを抱かずして何を抱く。いや、嘘つ…なんて感想は出できませんよ、可愛いないから。

「それにも、殴るつてえー」

「すいません」

「じゃあ、妻になる？」

「嫌ですよ」

「なんで…うーん…セックスする？」

「はあ？」

「なんですか」こいつ。もう一回殴つていいですか。

「すいません、いいですか」

また手を出しそうになつたところで、クーさんが面倒臭そつに割つて入ってきた。

『あなた方の結婚するしないはどうでもいいのですが、私と殿下はまだ政務がありますので、戻りたいのです。誠に遺憾ながら、彼女も連れて行かねばなりません』

どちら辺にクーさんにとっての遺憾があつたのだろうか。なんだ、あれか。政治家の微塵にも思つてないことの演技へたくそバージョンか。

「なに? クーラードヴォゲリア、邪魔するの?」

『結局の所、邪魔する事になるのが誠に遺憾です』

本当に、本当に、残念なことに。

ふうー、と残念そうな顔で溜息をつく。

そんな演技をする彼になにやら恐怖さえ覚える。

『彼女は、一階の“傀儡の姫”的庭園前の間で午後になれば会えますから。今日のところは、引いては下さりませんか、“色欲の君”…いえ、ゼアラル神の神子よ』

恭しくナチさんの前で膝を着き、クーさんは頭を垂れた。

「この神様の名前はゼアラルって言つんだね。何の神様なんだろう。やつぱり創造主? それにしても、クーさんが下手に出る姿は相手をおちょくつてる様にしか見えないのは何故だらうか。これって私の先入観かしらん?」

「…萎えた」

そう一言だけ残すと、彼の寝室なのに、彼は一瞬にして消え去った。

「わー、便利ー」

アホっぽい発言にイラッとしたのか、勢いよく立ち上がったクーさんに一の腕をガツチリ掴まれた。

痛い痛い痛い。ギリギリ締まつて、締まつて。

「…帰りますよ、来てください」

「つ、はあーい」

大人しく従つた私にまた苛立つたのか、大股で王子の前に歩いていった。

『クー、手を離せ』

『…っは』

『…力の加減ぐらじしろよ』

王子によつてクーさんの手は私のーの腕から離れた。が、会話のためにクーさんは一步下がつて私の肩に手を添えた。そして、王子の体に申し訳なさそうなぐらいに触れていた。

私のーの腕は、赤くなつてゐるだらうけど、あんまり痣にはならないと思う。なんせバー部だつたからね。ボールなんて日常茶飯事でぶつけられてたよーイジメじやないよー本当に！

『シャク、痛いなら痛いつていいなよ?』

『はい』

ダボッとした袖だつたもので、肩まで王子に捲られた。袖を肩に手を置いていたクーさんに持たせ、王子は赤くなつてゐるところを王子の細くて長い指で撫でてきた。

『痕にはならないと思うですし。大丈夫ですよ、王子』
つーか、撫つてえよ。

そう言つと、王子は不満そうな顔をした。

『どーして、俺だけ名前じやないかなあ』

『名前?』

『クーもあの頭ん中お花畠のナチアは、愛称で呼んでるの?』

『…そう、ですね』

『…覚えてないの?』

『(ああああああああああーー)』

声に出せない悲鳴を上げる。出せてなくとも王子たちには通じていのだけれど。と、いうか、私の馬鹿ーわざを自重しようつて考えたのはどこのどいつだよー私だよー！

『そんなことないですよー』

あははーなんて笑つてみるものの、王子の手は据わつてゐる。

やばい、打ち首?火炙り?水責め?

『……そんなことしないよ』

なんて言つてる王子の目は妖しく光つてゐる。

『動かないでね』

『……』

『返事は?』

『はい!』

私が元気な返事を返すと、王子はくすりと笑つた。その笑みに、私の腕は鳥肌が立つてしまつた。

『鳥肌・寒いの?』

私の返事は求めていなか、王子は一人で楽しそうに腕に指を添えていた。痣と手首を何度も指で往復していたと思うと、いきなり顔を伏せた。

『ちょ、王子!…』

私の制止も虚しく、王子は赤くなつてゐる一の腕に真つ赤な舌を這わせた。

『つ…!』

ぞわぞわした感覚が背中を走る。伏せられた目を王子は私に向けてくる。その挑発したような瞳に、私は息を飲んだ。

『…お仕置きだよ』

王子は赤くなつてゐる部分に歯を立てた。しかし、痛くもなんともない。ただの甘噛。

『うう…』

私の一の腕が王子の涎でテラテラし始めた頃、助けを求めてクーさんを見たが、クーさんは私の瞳をじつと見つめるだけだった。

なんでだよ!結構長い時間舐めてるよ、この王子!いい加減止めろよ!

『…こいつ見て』

ガリ

『…つ』

少し強く噛まれ、体が跳ねた。それに満足した王子は焼けずに白

い私の二の腕の内側、つまり柔らかい贅肉のオンパレードの部分にきつくキスマークを付けた。

『ちよ、王子！…』

『白いし柔らかい。結構残るんじゃない？』

そう言って、満足そうな笑顔を王子に向けられ、私が苦情を申し立てようとした瞬間、私たち三人の下に魔方陣が広がった。

「つえ」

グッとクーさんに肩を抱き寄せられ、驚いて顔を上げると、「帰ります」と無表情な顔で一言だけ言われた。

不敬罪で死刑にしますよ

あれから特に何もなく、時々騎士団に預けられながら私のマッサージ師生活は続いていた。常連客もつき、口口口で時々貴族様なんかも来られる。ふくよかでにこにこしたおじさまなんかを相手にするときは凄く楽しいのだが、如何にも興味本位で来ましたみたいな顔をする貴族やお前が王子の新しい愛人かみたいな顔してやつてくれる貴族もいたりして、かなーりやり辛い。貴族の綺麗なお嬢様がきたときはどうしようかと思った。粗末で高い台の上に、貴女その格好で乗れるの？みたいなね。ええ、結局乗りませんでしたとも。顔と体をじろじろ見て帰つていきましたよ。恐らく「こいつ女か？本当に王子の客人？」ってところでしょう。慣れましたよ、その目線！この世界、いや、この国の女性の基準に合わせてやるような私じゃないんですよ。郷に入れば郷に従え？無理矢理入れたのはどうちだ！

と、いうことで、この前肩につくべらに伸びたので、ミリティア（最初に会った美少女天使メイド）にはさみを借りて、バッサリ耳の下まできつてやりました。あの時のミリティアちゃんの顔はすがかつた。果然とした後、悪鬼のような顔をして私からはさみを取り上げてどこかへ行つてしまわれた。恐らくクーさんにチクリに言ったのだろう。

そんな訳で益々私は少年に近付き、幼く見られるようになつた。そこに關してはマイナスポイントだが、尊厳は守れた気がするのだ。この前、鏡を見てみたら高校生だったときの髪型とそつくりだった。そしてそして、スカートを断固拒否し、ズボンを貫いた。これはこれで再び、ミリティアちゃんと無駄な攻防戦を繰り広げることとなつた。彼女は眞面目にクーさんを信じており、彼が言つた言葉が例え間違つていようとも信じるぐらいの信用つぱり。何を言われたのか知らないが、スカートを無理矢理穿かせようとしてくる。それ

王子につけられたキスマークをすっかり消え、私が落ちてきてから一月が経つた。

王子につけられたキスマークをすっかり消え、私が落ちてきてから一月が経つた。

「つて、をおおおおおおおい！」

「なんですか、いきなり」

うるさい。と顔に書いたクーさんが私を睨む。

「自分で回想入れておいてなんですけど、もう一月経つやつたんですが！…」

「はあ？ 何が言いたいのですか」

クーさんの冷たい目線にもかなりの耐性が出来た。ミリティアちゃんにとつては、睨みつけられる私が羨ましいらしい。恋する少女は最早怖い。

「クーさん、本当に私が帰るための準備してますか？！」

「はい、今のをこちらの言語で」

「え、つと… キルティ シリア クー リーペアリ… つて
ちがあう！」

「何が違うんですか、合つてましたよ。ちなみに、『本当に』はリーペリアの前につけるのですよ」

「え、あ…はい。じゃなくて！」

ちなみにこの男は、私の電子辞書を奪い、全部コピーしていた。くつそ。電池がなくなれば終わりだと思っていたのに。

つまり、私がこちらの言語を必死こいて勉強している間に、クーさんは日本語が堪能になつてしまつた訳である。

「なんですか。私に髪のことで怒られたいのですか？それとも服装のことですか？」

「そんなどM精神を私は持ち合わせてないです！そもそも、髪や服のことで怒られる筋合いはないです！」

「髪の短い女性は大体同性愛の女性の現れですが、構いませんか？」

「つづり… 同性愛に偏見はないですよ、私は。たとえ、クーさんが王子に横恋慕をして、王子を魔術で縛り上げて犯そつとも、私は全力でクーさんを応援します！頑張れ、王子！」

「不敬罪で死刑にしますよ」

ツチ。「冗談が通じない男だ」。

「とりあえず、髪は伸ばしてください。今ままで、貴女はいつか少年狩りに遭いそうです」

「少年狩り？」

「おい、兄ちゃん。俺、お金ないんだよね。貸してくれない？ みたいなことですか」

そう言つと、クーさんに頬を抓り上げられた。

「いたいたいたたた！」

最近、この人魔術じやなくて直で攻撃していく。

「いつてー……で、具体的には何なんでしょう」

頬を擦りながら窺うと、呆れたクーさんがは渋々ながらも説明をしてくれた。

どうやら最近、市井の少年たちが忽然と消えているそうだ。10歳ごろから18歳くらいまでの少年たちが持つっていた荷物だけを残して消える。この前は、貴族の青年が（おそらく10代）街に出てそのまま帰つてこなかつたそうで、貴族の間でも恐れられている、らしい。

「労働力のためですか？」

「…この前になくなつた少年が遺体で発見されたのですが、男娼をやらされていた痕跡があつたと」

「…少年狩りが行われるほど、男娼に需要があるのですか」

男娼をおばさんが甚振る姿は想像できない。氣色の悪い笑みを浮かべた油ぎつしゅで女にもてなさそなおつさんが可愛い少年たちを甚振る姿が想像できてしまつ。

「少女だと、孕むからではないでしょつか」

「なるほど…」

少年だと孕まないから…なんつー短絡的な思考の奴だ。

「そうだ、今日、ミリティアちゃんと城下に出ようと思つてているんですけど、いいですか？」

「…今の話を聞いた結果の台詞でしたら、今から私は貴女をどうすればいいんですか」

クーさんの真顔に私も至極真面目に答えてしまった。

「…調教、ですか？」

「わかつているのなら、そこに直つなさい。鞭で叩いて差し上げましょう」

「待つて待つて待つてください……でも、ミリティアちゃんと一緒です」

「むしろミコティアが危険に晒されるでしょう」

「やつぱりか。あんな少女、誰もが攫いたいと思つわ。

「えつと、その、じゃあ、王子を護衛役にして嘘です、嘘です。ごめんなさい、すいません」

クーさんにあわや首を絞められたといひだつた。えーえーえーえー、じやあ…

「ケドネスさん！」

「副団長からの許可が下りません」

「んー、ナツシオ君！」

「副団長からの許可が下りません」

「なにそれ、テンプレかなんかなの？」

「うううーん…ナチさん?」

「彼は現在、神殿で一月“ゼアラル神復活祭”の準備でいません」

“ゼアラル神復活祭”：クリスマスみたいなもんかな？

「えええええ…じゃあ、私一人で行きます

「貴女は私を怒らせたいんですか」

「そんな訳ある訳ないじゃないですか！」

「…私が行きます

「は？」

私の言葉にクーさんの額に青筋が浮かび上がった。
「ですから……貴女の護衛として私が行きますと言つたのです
なにそれ、苦行？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778u/>

何故私はこいつに恋をした？

2011年11月20日03時16分発行